

日本テコンドー協会法・試合法

全日本F T大会 個人戦 蹴武型A級ルール

2017年12月09日

日本テコンドー協会

宗師範 河 明生

日本テコンドー協会（J T A）が普及するのは、J T A七大精神に基づく武道・日本跆拳道であり、その魂は蹴武の型である（2015年9月15日14型完成）。

蹴武の型における当代最高峰は、全日本F T大会A級蹴武型の優勝である。

ここに全日本F T大会におけるA級蹴武型ルールを定めるものとする。

記

第1条 全日本F T大会・蹴武の型A級選抜者

全日本F T大会における蹴武の型A級チャンピオンは、蹴武型の最高水準に達している優れた選抜者のみでその座を競わなければならない。

- 1, 選抜者の上限は8名以内とする。
- 2, 優秀な8名は次の中から選抜されるものとする。
 - 1) 前年度、全日本F T大会蹴武の型A級チャンピオン
 - 2) 前年度、全日本F T大会蹴武の型A級2位および3位
ただし、最低1回は全日本F T大会予選会・蹴武の型一部A級に出場しなければならない。
なお、勝敗は問わない。予選会への出場によって全日本F T大会蹴武の型A級への出場権が確定する。
 - 3) 前年度、全日本F T大会蹴武の型B級優勝者。
ただし、最低1回は全日本F T大会予選会・蹴武の型一部A級に出場しなければならない。
なお、勝敗は問わない。予選会への出場によって全日本F T大会蹴武の型A級への出場権が確定する。

4) 本年度、全日本F T大会・蹴武の型A級ベスト7以内のランカー

①全日本F T大会予選会・蹴武の型一部A級で優勝していなければならない。推薦出場は行わない。

②全日本F T大会における蹴武の型A級優勝者、2位、3位およびB級優勝者の中、引退等による欠員数に応じて選抜されるものとする。

第2条 全日本F T大会・蹴武の型A級ルール総則

1, 1回戦から準決勝までトーナメント戦を行う。

2, 年齢満50歳迄(全日本F T大会当日)の男女混合試合である。

3, 選手は青または赤の襷を黒帯の背後にしめ、試合終了後、担当実行委員に襷を返却しなければならない。

4, 審判

①青または赤の旗によって優劣を明らかにしなければならない。

②審判3名中、2本の旗が上がった選手を勝者とする。

③引き分け判定を禁じる。

5, 指定型

1) 1回戦より準決勝戦迄は、主審がひいた「指定型の札」に明示された型によって試合を行う。

2) 「指定型の札」の札は次の通り。

士(サムライ)系蹴武型 および 刀槍(トウソウ)系 蹴武型

①武蔵・後ろ横蹴りの型

②謙信・後ろ回し蹴りの型

③清衡・捻り蹴りの型

④義家・踵落とし蹴りの型

静流円麗(セイリュウエンレイ) 蹴り系蹴武型

①柳韓・飛び踵落とし蹴りの型

②忠武・飛び捻り蹴りの型

③若光・飛び後ろ回し蹴りの型

④乙支・飛び後ろ横蹴りの型

四方蹴り系

①関羽・飛び横蹴りの型

②張良・飛び回し蹴りの型

③聖徳・飛び前蹴りの型

6、決勝戦もしくは3位決定戦は、選手が選択した自由型のみで優劣を決する。

第3条 全日本FT大会限定・蹴武の型A級ルール

1、A級蹴武型は1回戦より準決勝戦迄、完全決着をはかるため、自由型と指定型の2つの型を演武しなければならない。

1) はじめに自由型を同時に演武する。審判は自由型の勝敗を明らかにする。

2) 次に指定型を同時に演武する。審判は指定型の勝敗を明らかにする。

2、自由型は連続して演武することはできない。よって選手は、2つの自由型を準備すること。

ただし、自由型と指定型とが同一の場合であっても可とする。

たとえば、A選手が自由型で張良を演武した後、主審がひいた「蹴武型の札」が張良でも演武可とする。

3、勝敗

1) 自由型・指定型いずれも、同じ選手が連続して勝利した場合は2連勝した者を勝者とする。

2) 1勝1敗の場合

たとえば、A選手が自由型で勝利し、B選手が指定型で勝利した場合、

より難易度が高い指定型で勝利したB選手を勝者とする。

2連勝すれば完全決着となり、破れた選手はより一層精進しなければならないことを悟る。

他方、1勝1敗で破れた場合は、僅差での敗戦となる。

次年度全日本FT大会で勝利・入賞・優勝するための客観的な指標となり、励みにもなる。

4、失格

1) 自由型・指定型の演武中に動作が止まる等、途中棄権した場合は失格とする。

- 2) 一方の選手が失敗した場合、もう一方の選手の演武が完遂した後、主審が後者の勝利を宣言する。
- 3) 両者とも途中棄権した場合は、両者失格とし、繰り上げ入賞は行わない。
たとえば、決勝戦進出者がいずれも途中棄権した場合、3位入賞者が繰り上げで優勝者とはならない。

5, 決勝戦

- 1) 決勝戦に進出した2名は、それぞれ後楽園ホールリング上で自由型演武を1つ行う。
- 2) 決勝戦はもっとも得意とする自由型での演武が望ましいので、
準決勝戦で演武した自由型であっても連続して演武することができる。
- 3) 決勝戦で演武を失敗した場合は表彰しない。
蹴武の型試合は己との戦いでもある。己に破れた者を表彰することはできない。
たとえば、決勝戦進出者がいずれも演武を失敗すれば優勝者・2位の表彰は無しとする。

本法は、2017年11月25日より施行する。